

開港のひろば

編集・発行／横浜開港資料館
〒231-0021 横浜市中区日本大通3 電話(045)201-2100
ホームページ <http://www.kaikou.city.yokohama.jp/>

Number
153

発行 日／2021年(令和3)12月24日(金)
印刷 刷／中川印刷株式会社



1951(昭和26)年当時のイギリス総領事館 ベイカーベイツ氏寄贈・当館蔵

特集

開館40周年を迎えた 横浜開港資料館

一九八一(昭和五六)年六月二日の開港記念日に開館した横浜開港資料館は、二〇二一(令和三)年で開館四〇周年を迎えました。当館では、これまで四〇年にわたって、幕末から昭和初期にかけての横浜に関する歴史資料を収集・保存し、閲覧に供するとともに、調査研究の成果を、展示・出版などのかたちで公開してきました。約二七万点におよぶ収蔵資料は、横浜市民にとって大きな財産といえます。

横浜市指定文化財である旧館の建物(旧英国総領事館)も、一九三二(昭和六)年の竣工から九〇年が経ちました。一八六九(明治二)年に

イギリス領事館が建設されて以来、一九七二(昭和四七)年に領事館が廃止されるまで、一〇〇年以上にわたって、この地はイギリスと深い関係を有してきました。開館四〇周年の企画展では、この日英関係をテーマに、二期に分けて企画展「七つの海を越えて」を開催しました。

そして二〇三二(令和一三)年、当館は開館五〇周年を迎えるとともに、旧英国総領事館も竣工から一〇〇周年を迎えます。その大きな節目に向けて、当館では、日米和親条約が締結された由緒ある立地を活かして、より多くの皆様に横浜開港の歴史を体感していただくとともに、近隣の観光エリアをめぐる拠点として活用していただけるよう、施設の改修工事を順次おこなって参ります。

二〇二一(令和三)年度は、まず付属棟(旧門番所)の改修工事に着手しました。かつて領事館のガレージとして用いられていた倉庫棟を含めて、劣化が進む外壁や屋根周りの補修をおこなうとともに、内装を一新してあらたな活用に向けた整備をおこないます。さらには旧館の建物についても、記念ホールと記念室(旧総領事室)に限られていた公開範囲をさらに広げて皆様を迎えられよう、整備を進めて参ります。

長期にわたってご不便をおかけいたしますが、何とぞご理解いただきますようお願い申し上げます。新しい横浜開港資料館の姿をどうぞご期待ください。

(青木祐介)

イギリス総領事館・昭和の半世紀



図1 竣工直後のイギリス総領事館
1931(昭和6)年 ベイカーベイツ氏寄贈・当館蔵

一九八一(昭和五六)年に開館した横浜開港資料館であるが、この年は、旧館(旧英国総領事館)の建物が竣工して五〇年の節目でもあった。建てられて五〇年経てば、現在では立派な文化財候補であるが、旧館の建物は、開館から二〇年近く経った二〇〇〇(平成一二)年に、「横浜開港資料館旧館(旧横浜英国総領事館)及び旧門番所」として、横浜市の指定文化財となった。本稿では、イギリス総領事館の建物が、一九三一(昭和六)年の竣工から、横浜開港資料館の旧館として再生するまでの半世紀の道のりを、残された資料をもとに振り返りたい。

復興建築としての総領事館

現在の旧館(旧英国総領事館)の建物は、一九二三(大正一二)年九月一日の関東大震災で倒壊した領事館に代わって、鉄筋コンクリートで建てられたもので、イギリス本国の工部省が設計を手がけた(図1)。堅実な古典主義の建築様式で、一八世紀から一九世紀にかけてのジョージ王朝時代の様式(ジョージアン様式)でまとめられている。外壁は石積みのように見えるが、人造石の洗い出し仕上げである。

目地を入れて仕上げることで、あたかも石を積んだかのように見せている。室内は一階に領事館機能を配し、二階は領事館職員員の居住スペース、三階は使用人の居室として用いられていた。領事館の敷地内にあった「たまくす」の木は、震災で焼失



図2 総領事館の待合室(現在の記念ホール) 1931(昭和6)年 ベイカーベイツ氏寄贈・当館蔵

したもの、その後ヒコバエが芽生えて現在に至っている。ただし、領事館の再建にあたって、建物の正面に「たまくす」が位置するように、当初の位置から海側に約一m移設されている(堀勇良「ペリー横浜上陸の地」『開港のひろば』五七号)。

竣工当時の領事館の建物に関する資料は少ない。建物とあわせて文化財指定された当時の図面群三六点が、当館閲覧室にて複製本で公開されているが、建物内部の様子を撮影した写真はこれまでほとんど確認されておらず、元領事館員のベイカーベイツ氏から寄贈された写真の一枚に、わずかに待合室(現在の記念ホール)の写りが残されているのみである(図2)。

さて、当館の敷地を取り囲むコンクリート塀の西南隅(県庁東庁舎との境)の足元に、「GR」と刻まれているのが確認できる(図3)。これはラテン語の「Georgius Rex」の頭文字で、英語にすると「King George」すなわちジョージ王朝の時代に建てられた建物であることを示している。イギリス領事館が建てられた一九三一(昭和六)年当時、イギリスではジョージ五世が王位に就いており、その王家の名前が足元に刻まれているわけである。



図3 塀に刻まれた「GR」の文字

なお、山手にある「横浜市イギリス館」は、一九三七(昭和一二)年にイギリス領事公邸として建てられたもので、こちらの外壁には、王冠とともに「GR VI 1937」の文字が刻まれており、ジョージ六世の治世下での竣工を示している。当時のイギリス総領事は、この山手の領事公邸から山下の領事館へと通っていた。

総領事館の戦中戦後

一九四一(昭和一六)年一月八日、日本はアメリカ・イギリス両国に宣戦布告し、アジア太平洋戦争へと突入した。神奈川県警は、午前一時の宣戦布告と同時にイギリスおよびアメリカの領事館に係官を派遣



図4 昭和20年代のイギリス総領事館
横浜都市発展記念館蔵

して、一切の公館機能を停止させた。公館員は領事館もしくは私邸に「保護収容」され、監視下のもとに置かれた。県の記録によれば、一九四二（昭和一七）年三月一日の時点で、山手のイギリス領事公邸には、公館員と日本人使用人の計一二名が収容されており、そのうち代理領事のマクヴィティーをはじめ三名が同月三日に刑務所へ収監された（『横浜市史Ⅱ 第一巻（下）』）。こうしてイギリス総領事館は、主を失ったまま一九四五（昭和二〇）年八月の終戦を迎えることとなる。

終戦後、イギリス総領事館は業務を再開するが、横浜の市街地は多くの施設が進駐軍による接収を受けており、横浜の戦災復興は大きく遅れ

ていた。当時の様子を撮影した写真が（図4）である。神奈川県庁舎の屋上から撮影されたと思われるが、現在は記念室に展示されているイギリス王室の紋章が、一階玄関上部のペディメントに掲げられていることがわかる。建物の左側には、やや小ぶりな「たまくす」の木はつきりと確認できる。

総領事館から資料館へ

その左奥に見えている平屋の建物群は、当時の米軍兵舎ミンドロ・コートである。米軍兵舎というカマボコ兵舎のイメージが強いが、関内地区には、独身将校や軍属向けにこうした三角屋根の建物も多く建てられていた。この施設の接収解除は一九五二（同二七）年八月に始まることから、写真の撮影時期はそれ以前であろう。

一九七二（昭和四七）年にイギリス総領事館が閉鎖されると、横浜市ではその跡地利用についての議論が起きた。当時の横浜市長飛鳥田一雄は、横浜市に寄贈された作家大佛次郎の資料を展示公開する施設を想定していたが、日米和親条約締結の地である同地には、開国を記念するための施設が相応しいという市民からの手紙を受けて、大佛次郎記念館の建設地は山手へと変更されたという（田村明『都市プランナー田村明の闘い』学芸出版社）。

横浜開港資料館が建設されることが決定するが、総領事館（旧館）の改修と新築の展示施設（新館）の設計を任されたのが、岡山県倉敷市出身の建築家浦辺鎮太郎である。現在でこそ、機能を失った大規模な工場施設を、リノベーションによって商業施設として活用することは珍しくないが、一九七三（昭和四八）年という早い時期に、浦辺が倉敷紡績所（現在のクラブウ）の工場群を、複合文化施設「倉敷アイビースクエア」として再生させた事例は、大きな注目を浴びていた。

一九七九（昭和五四）年四月、横浜市はイギリス総領事館の建物を買収すると、翌年

六月から新館の建物と旧館（旧総領事館）の改修工事に着手した。新館を「昭和の土蔵」として構想した浦辺は、なまこ壁風の目地を外壁に施し、「たまくす」の木を介して旧館と新館が向かい合い、中庭を形成する配置を取った（図5）。旧総領事館の建物が海岸通りから見えないように新館を

配置する浦辺の案に、当時の横浜市の担当者たちは驚いたというが、海岸通りから「たまくす」に向かつて大きく開けられた門形に、日本の伝統的な長屋門のイメージが読み取れるとの指摘もある（『建築家浦辺鎮太郎の仕事』学芸出版社）。浦辺事務所に残されている平面スケッチでは、中庭は「ペリースクエア」と称され、「たまくす」を中心に回廊がめぐる構成となっていたが、最終的にコロネードは採用されていない。

そして一九八一（昭和五六）年三月三十一日、一連の工事が完成し、同年六月二日の開港記念日に横浜開港資料館がオープンした。（青木祐介）



図5 旧館（手前）と新館（奥） 1981（昭和56）年 当館蔵

新発見！江戸のイギリス公使館の古写真

—チャールズ・ウィード撮影の高輪接遇所—

二〇二二年七月一七日から一月七日までの会期で開催された企画展「七つの海を越えて 開国前後の日本とイギリス」。会期後半の一ヶ月間にかぎって、新たに見出された江戸のイギリス公使館（高輪接遇所）の古写真（二葉）を展示した。資料は個人の収集家の方がごく最近入手されたもので、撮影者と推定されるのはチャールズ・ウィードというアメリカ人カメラマンである。明治維新以前の江戸にあった外国公館を写したきわめて珍しいショットであり、ここであらためて解説をおこないたい。

江戸のイギリス公館の変遷

安政六年（一八五九）六月、前年に締結された日英修好通商条約の定めによって、江戸にイギリス公館が設置された。初の公館（当初は総領事館）は高輪の東禅寺（現港区高輪）の一部を間借りするかたちで開かれる。しかし、東禅寺は文久元年（一八六一）五月に水戸浪士の襲撃に遭うなど警備面での不安を抱えるようになる。そこで幕府は同年、複数の外国公館を御殿山（現品川区北品川）にまとめて設置することを決定、工事を開始する。ところが翌年一二月、ほぼ完成をみていた御殿山のイギリス公使館は、長州藩士高杉晋作らの焼き討ちにあつて焼亡してしまった。その後数年、攘夷派勢力の伸長もあつてイギリス公使はおもに横浜に居住していたが、情勢が落

ち着きを見せてきた慶応元年（一八六五）、イギリス側は江戸に本格的な拠点を設けることを企図する。六月一三日、イギリスの新公使ハリー・パークスは泉岳寺（現港区高輪）前を新たな公使館の敷地とすることを幕府に要望。幕府は一五日にこれを容れた。幕府は、建築する建物を公使館としてイギリスに貸し渡すものの、のちに「接遇所」としてみずからも使用するかたちにして工事を開始。慶応二年三月に一応の落成をみた（ただしパークスが公使館を移転するのは慶応二年九月から一〇月にかけて）。これが今回の写真に写されているイギリスの新公使館（高輪接遇所）である。

高輪接遇所の古写真

高輪接遇所の古写真は従来、当館が所蔵しているもの（以下(A)とする）が知られてきた。(A)は一八六六年夏に来日したイギリス陸軍第九連隊のグレニー中尉（Fargular Glennie）が所蔵していたアルバム（当館では「イギリス横浜駐屯軍士官幕末写真帳」と呼称）のなかに貼付されているもので、サイズはタテ八・四×ヨコ八・八センチ。撮影者はチャールズ・ウィードと推定される。写真は港区立港郷土資料館の特別展「江戸の外国公使館」（二〇〇五年）でその存在が初めて世に知られることになり、その後当館が二〇〇六年度に入手した。高輪接遇所についてはアーネスト・サトウの回想

録等で知られていたが、その外観を写した古写真が残存していることには新鮮な驚きがあった。そもそも幕末（一八六八年以前）の江戸の古写真が新たに見つかるとは稀である。ところが、ウィードが撮った高輪接遇所の写真は一カットだけではなかったのである。今回新たに見出された高輪接遇所の古写真（以下(B)とする）は二葉。(A)の右側に接続するかたちで撮影がなされている。各タテ二七・五×ヨコ三八・五センチの台紙に、各タテ二四・六×ヨコ三三・八センチの鶏卵紙のプリントが貼付され、二枚を横になぎあわせて接遇所の敷地内の過半を観察することができる。

公使館の内と外

と書き込みがある。公使館の建物のみならず、その前面（東側）の空地・建物・庭園、そして高輪の町家まで写し込まれており、全体として情報量の多いものとなっている。

写されている公使館（接遇所）の様相について、幕府外国方の手元にあった絵図（東京大学史料編纂所蔵「高輪泉岳寺境内上ヶ地接遇所惣絵図」等）と、イギリス外交官の証言も参照しながら検討してみよう。(A)と(B)左に写される寄棟の屋根

左側の台紙には
"British
Legation,
Yeddo."
右の台紙には
"Garden
at the
British
Legation,
Yeddo."



チャールズ・ウィード撮影 慶応3年(1867)頃 個人蔵



図1 高輪接遇所の古写真(A)「イギリス横浜駐屯軍士官幕末写真帳」
チャールズ・ウィード撮影 慶応3年(1867)頃 当館蔵

に見える建物は泉岳寺とその子院(功雲院)のようである。ここに写されているのは公使館の主要部分(敷地面積二六五九坪)だが、撮影地点の手前と右側の土地もイギリス公使館のために供されていた(厩などとして使用)。

さらに、(B)右の接遇所の柵の外側には芝車町の町家が見える。東海道は海寄りを走っているから、ここに見えるのは主にいわゆる「裏店」(下層町人の借家等)であろう。幕末期の江戸の町人地が古写真に残されている例は極めて少ないが、(B)はさらに画像資料の少ない裏店を写しており、町人地の空間復元の史料としても貴重な素材になるだろう。

なお、写真の撮影年代については、ウィードの来日期間や高輪接遇所の完成・使用時期、日時が判明しているウィードの別の写真(浜御殿)などから慶応三年(一八六七)頃と推定しておきたいと思う(セバステイアン・ドブソン氏からも教示を得た)。

カミング顿ウィード

本写真を撮影したと推測されるチャールズ・リアンダー・ウィード(Charles Leander Weed 1824-1903)はニューヨーク生まれのアメリカ人である。一八五〇年代の写真黎明期にカリフォルニア・ヨセミテ渓谷を撮影したカメラマンとして知られ、一八五九年にサンフランシスコに拠点を移した。一八六〇年代に

は東アジアでも写真家として活躍し、一八六六年に香港で写真館を開業している。そして、一八六七年から一八六八年にかけて来日して各地を撮影。

一八七〇年にサンフランシスコにもどり日本と中国の風景を一連のシリーズ写真として刊行した。しかし、彼の写真は現在日本国内にはさほど残っておらず、またフェリーチェ・ベアトなど日本をベースに活躍した写真家にくらべてウィードの名はほとんど知られていないようである。

当館の所蔵する幕末明治期の古写真は日本有数のコレクションであるが、今後も当該期の知られざる日本の風景の発掘につとめたいと思う。(吉崎雅規)

◎参考文献
港区立港郷土資料館編『江戸の外国



図2 新たに見出された高輪接遇所の古写真(B)

公使館(同、二〇〇五年)／吉崎雅規『幕末江戸と外国人』(同成社、二〇二〇年)／Terry Bennett, *Photography in Japan, 1853-1912* Tuttle, 2006／Peter E. Palmquist, "California's Peripatetic Photographer: Charles Leander Weed" *California History* Vol.58, No.3, 1979 そのほか本稿作成にあたり、古写真研究家のセバステイアン・ドブソン氏、チュエリッヒ大学のステラ・ヤングマン氏からも教示を得た。また古写真の出陳と利用を快くご許可いただいたご所蔵者様に心よりお礼を申し上げます。

(ジャークン・ヘッドという西洋の建築手法)の二棟が公使館として利用された建物である(一棟は公使パークス専用、もう一棟は公使館員用)。手前側の建物の入口には制服を着た二人の衛兵が姿勢を正して直立しているから、こちらがパークスの使用した建物と思われる。一方奥の建物の付近には和服を着てちょんまげを結った日本人や、制服を着た外国人の姿も見受けられる。(B)右の手前の庭は幕府側の絵図には見えないうが、本写真とそのキャプションから「庭園」が築かれていたことが判明する。その奥の建物は、絵図に「兵士部屋」との記載があり、イギリスもしくは幕府の警備兵の詰所であろう。なお、公使館のさらに上奥

関東大震災罹災者を救済した 民間団体の活動

大正一二（一九二二）年九月一日正午に発生した関東大震災は、相模湾北西部を震源とする巨大地震で、マグニチュードは七・九と推定されている。震源地に近い都市である横浜の被害は甚大で、三五、〇〇〇棟を越す建物が倒壊・焼失したほか、約二六、〇〇〇人も死者・行方不明者を出す悲劇の地となった。震災の被害により、住居や財産を失った数万人に及ぶ罹災者は、困窮の淵に立たされ、これらの人々の救済が急務となっていた。この対応のため、神奈川県では三矢宮松内務監察官、安河内麻吉神奈川県知事、渡辺勝三郎横浜市長を幹部として、中央政府・県・市が一体となって震災救済事務に当たる体制を構築し、罹災者救済に取り組んだ。その内容は、神奈川県社会事業協会編・発行『神奈川県社会事業概要』（一九二五年、当館蔵、以下『概要』）には以下のように記述されている。

県市吏員を挙げて専心救済に努力し、横浜市内のみにて玄米三万一千余俵、外米五万一千俵、小麦粉一万余俵、缶詰四万余箱、其他豆、味噌、醤油、食塩、生野菜、塩干魚等の食料品、及び木炭八万俵、寝具三万七千余組、毛布二万枚、反物二万反、木材四万石（略）等の日用品其他生活必需品を配給せり。又衣食の救済と相俟って急務を要したる住宅問題解決の一方法として、差当たり三万六千余坪の「バラック」を建造

し、罹災者四万人を之に収容せり。この記述からは、衣食住に関する様々な物資の供給に公的機関が尽力していたことが把握できる。この他、横浜市では政府への救援要請、他府県への食糧・衛生材料供給依頼、避難所、救護所の設置など様々な罹災者救済活動が展開された。このような公的な救済活動以外に、罹災者救済に大きな役割を担ったのが、民間の諸団体であり、『概要』から各団体の活動を知ることが出来る。このうち、現在でも市内で活動を継続している団体の活動を紹介すると、明治二〇（一八八七）年に設立された日本赤十字社神奈川県支部は、震災によって施設を全焼するが、イタリヤの赤十字社より寄贈された組み立て家屋を日本赤十字社本部経由で寄付され、南区中村町玉泉寺内に救護所を設けて罹災者の救済に従事した。また、明治三二（一八九九）年に設立された横浜孤児院（現・横浜市三春学園）は震災のために施設の多くを焼失するが、本部施設は焼失を免れたため、直ちに庭園を開放し避難者約五〇〇名を収容する。特に父母兄弟と離別して迷子となった幼児一五〇名を保護したほか、嘱託医師の助力を得て院内に臨時救護所を開設して約三、五〇〇名を治療した。この他、震災翌年の大正一三（一九二四）年二月に設立された乳児保護協会は、震災後に困窮する乳児と母親のために、海外などの支援による二、〇〇〇箱以上もの

ミルクを県下一九カ所のミルクステーションを通じて配給したほか、十全医院（現・横浜市立大学附属市民総合医療センター）の医師一名を嘱託して、各地のバラックを巡回して乳児及び母親五〇〇名以上を診察したことが記録されている。これらの団体のなかでも、特に多岐にわたる活動を展開したのが、横浜YMCA（横浜基督教青年会）である。同会は、明治一七（一八八四）年に横浜海岸教会の青年たちが中心となって結成した基督教青年会を起源とする組織で、娼娼運動などキリスト教の精神を基礎とした社会問題に対する取り組みや、英語教育の普及に加え、米国のYMCAで考案されたバスケットボールやバレーボールなどのスポーツの普及にも大きな役割を果たしていた。大正三（一九一四）年には財団法人設立の認可があり、大正五（一九一六）年に中区常盤町一丁目に四階建ての会館を建設するなど活動を拡張する。震災時において、本会館は鉄筋コンクリート造の建物であったために大きな被害を免れ、ここを拠点として諸種の罹災者救済活動が展開された。その内容は、横浜基督教青年会編・発行『復興せる横浜の基督教青年会』（一九二四年、

当館蔵、図1）で詳しく知ることが出来る。同書の序文において、同会が全国のYMCA会員の助力を得て、市内各地に設置したテントを拠点とした生活必需品の配給をはじめと記されている（図2）。その具体的な内容について、同書では一覧が掲載されており、飲料水給与…三、三八四、道案内…一、三八六、休憩者…一、五〇八、郵便取扱…三、五、九三四通、各種相談…一、一九一、名、無料理髪…三、九八名、巡回慰問…三、六八六名、慰問品…一、五一、一五合、コンデンスマルク配與…二、九三、私製端書分與…二、六二九



図1 『復興せる横浜の基督教青年会』表紙



図2 横浜YMCAが設置した罹災民救済用テント(『復興せる横浜の基督教青年会』所収)



図3 学童のための活動写真会(『復興せる横浜の基督教青年会』所収)



図4 クリスマス聖歌隊のトラック(『復興せる横浜の基督教青年会』所収)

枚、手紙代筆…二八八名、切手葉書取次…三、一五八名、シャベル・リヤカー其他の貸出…七二三名、荷物一時預…一〇四名、傷病者手当…二四六名、喫茶店利用四、五四九名、児童倶楽部出席…二、〇〇〇名、会場奉仕人員…三七七名と記載されている。多様な同会の活動の中で、筆者が注目する活動が郵便物に関する取り組みである。横浜YMCAが所蔵する「基督教青年會震災救済事業 横浜支部事業報告」(第六号、一九二三年九月三〇日発行)では、この取り組みについて以下のように記している。

全市の三等郵便局とポストは今回の大震災のために九分九厘まで其姿を亡くして市民の困惑実に甚だしくなった。我支部は中央部及横浜駅前テント及長者町テントに夫々大ポストを設備して市民の便宜を計り又郵便本局より数百枚の切手端書の配分を受けて取次をやって居る。又転居届数百枚を用意して市民に配布している。明治以降に都市化した横浜の市民には、地方から移住してきた人々も多く、郷里の家族に安否を知らせたという要望が切実なものであったことが推測できる。このようなニーズに因應するために、臨時ポストの設置および手紙代筆サービスや、葉書の配布などを行った同会の取り組みは、市民の大きな助けとなったことが想像できる。

横浜YMCAの震災直後の取り組みは、九月一七日(一〇月末日まで)行われたが、その後も様々な罹災者支援が行われたことが、『復興せる横浜の基督教青年会』の序文に以下のように記されている。十一月会館の応急修理を了へて各部の活動を開始いたしました、越へて一月よりは社会教育部の多大の後援を得て学童慰安の爲め活動写真御話会等によって淋しい彼らを慰めました、二月教育部を復興し体育部の実演会を開き、三月には美化運動を起して六万余袋の花種子を市内に分ち、四月には市民大学、宗教運動等に力を注ぎ、五月には会員倍化運動に好成績を挙げ、六月には山下町に宿泊所を起工し、公衆食堂を開設して

社会奉仕の実を挙げ、七月夏期天幕村を設立し、八月下旬大成功裡に終了いたしました。

ここで注目できるのは、罹災してバラック生活を送る学童のために、活動写真の上映会やお話会など、諸種の取り組みが行われていることである(図3)。同会では、震災直後から児童倶楽部を設置し、バラック内での運動会など、震災で傷ついた子供たちのケアに尽力してきた。引用文中の夏期天幕村もその取り組みの一つで、罹災児童支援を目的とした湘南海岸へのキャンプが企画され、その後も長く継続されることになる。このほかにも『概要』には、中国人や朝鮮人、および震災時に活躍した消防士や警察官を対象とした慰安会の開催や、娯楽に乏しいバラック住民のための聖歌隊巡回(図4)、瓦礫の町に花を咲かせる美化運動など、物資だけではなく精神的な援助にも積極的に取り組んでいたことが記されている。

以上のように、震災時における民間団体の活動は地域の歴史に記録されるべき顕著な事例であると考えられる。これらの団体の活動は、公的な援助の手が届かない罹災者の物心両面のケアに大きな役割を果たしていたといえるだろう。特に横浜YMCAの活動については、戦災を免れた文献・写真資料が同会に多く残されていることから、今後も継続して調査研究を進めてゆきたい。

(西村健)

日本最古のスポーツクラブ YC&AC

会期：2021年12月3日(金)～2022年3月3日(木)
会場：新館2階ミニ展示コーナー



YC&ACフットボールチーム集合写真
明治39(1906)年 当館蔵

発足し、クリ
ボール・クラ
ブ)の四団体
が合併して
浜フット・
YFBC(横
ル・クラブ)、
ベース・ボー
BBBC(横浜
ジョン)、Y
アッシュエイ
レティック・
チユア・アス
四)にYC&CとYAAA(横浜アマ

本年開催の東京二〇二〇オリ
ピック・パラリンピックに続き、来
年は北京冬季オリンピック・パラリ
ンピックやFIFAワールドカップ
が開催されるなど、スポーツに注目
が集まる時期である。
横浜は近代スポーツ伝来の地のひ
とつである。開港後、横浜に住み始
めた外国人たちによって、居留地
は様々なスポーツが行われ、ここ
から日本中に近代スポーツが浸透し
ていった。居留地におけるスポーツ
の発展には、各種のスポーツクラブ
が大きな役割を果たしたが、なか
でも明治元(一八六八)年に英国人貿易
商ジェームス・P・モリソン (James
Pender Molison) が中心となり設
立されたYCC(横浜クリケット・
クラブ)を源流とするYC&AC(横
浜カントリー・アンド・アスレティッ
ク・クラブ)は、一五〇年以上もの
歴史を持つ日本最古のスポーツク
ラブで、現在も活動を継続している。
YC&ACは明治一七年(一八八
四)にYC&CとYAAA(横浜アマ

ケット、ラグビー、陸上競技、野球、
テニス、サッカーなど、諸種のスポ
ーツを楽しむ外国人の社交場としての
役割を果たした。所在地は最初は横
浜公園だったが、大正元(一九一
二)年に現在の中区矢口台に移転し、名
称も現在のものに変更する。
YC&ACで行われた様々なス
ポーツのうち、今回の展示で特に取
り上げるのが、サッカーである。平
成三〇(二〇一八)年にYC&AC
のサッカークラブは、日本最古のク
ラブとしてイングランドのシェ
フィールドFCから認定された。同
FCは安政四(一八五七)年に設立
された世界最古のサッカークラブと
して国際サッカー連盟(FIFA)
から認められたクラブで、平成二五
(二〇一三)年に世界各国の最古の
サッカークラブでつくるクラブ・オ
ブ・パイオニアーズを設立し、各国
のサッカー史の発掘に努めている。
YC&ACは明治二〇(一八八七)
年に横浜で発行された新聞『ジャパ
ン・ウィークリー・メール』の記事
が根拠となり、クラブ・オブ・パイ
オニアーズの二〇番目のメンバーに
認定されることになった。
今回の展示では、当館が所蔵する
明治・大正期のYC&AC関係資料
のほか、日本人で初めてYC&AC
理事長となった細貝貞夫氏より、横
浜市へ寄贈が予定されているYC&
ACサッカー関連の資料を展示す
る。横浜の外国人社会において最も
伝統のある社交クラブの歴史に触れ
ていただければ幸いである。
(西村健)

資料館 だより



です。
閲覧希望日前日の正午までに、電話で
予約してください(休室日は受け付けませ
ん)。予約なしでの入室はできません。
*詳細は、当館ホームページでご確認いた
だくか、電話でお問い合わせください。
開室時間 10:00～12:00、
13:30～15:30
休室日 月曜日・火曜日(祝日の場合
は翌日)、資料整理日、年末年始など
電話番号 045-201-2150
電話受付時間(開室日のみ) 10:00～
12:00、13:00～16:00

▼twitter

展示や所蔵資料のほか、開港資料館の
「今」の情報をお届けします。
twitter @yoko_archives

休館日・休室日のお知らせ (12/24～3/31)

休館日：12/27(月)～1/3(月)、月曜日(祝
日の場合は翌日)
閲覧室休室日：休館日のほか火曜日(祝
日の場合は翌日)、資料整理日2/16(水)
～2/18(金)、3/31(木)

*今後の状況により、開館日や開催内容等
を変更する場合がございます。最新情報
は、当館ホームページでご確認ください。

▼オンラインショップ オープンしました <https://kaikou.shop-pro.jp/>

展示図録や研究紀要、複製地図などの
オリジナルグッズを販売する、オンライン
ショップをオープンいたしました。
今後も横浜の歴史を楽しく、分かりやす
く伝える書籍や横浜のお土産にぴった
りなグッズを紹介していきます。
ご来店お待ちしております。



◀オンラインショップへは
こちらから

オススメの書籍

『図説 日英関係史 1600～1868』
編：横浜開港資料館 発行：公益財団法人
横浜市ふるさと歴史財団・原書房
B5判、170頁、オールカラー2,750円(税込)
江戸時代(1600～1868)の日本とイギリ
スの歴史的関係をわかりやすく紹介する
「図説」本。

▼学芸員実習生を受入れました (2021年10月16日～11月6日)

今年度の学芸員実習は、当初8月末の
実施を予定していましたが、新型コロナウ
イルスの感染拡大を受け、10月から11月
にかけての週末に日程を変更して開催し
ました。換気のできる広いスペースを確保
するため実習会場には講堂を利用し、おも

座学を中心としながら、8名の実習生が、
当館の根幹業務である資料の調査・収集・
整理・保存・公開のプロセスについて学
びました。最終日には、実習内容をふま
えて、これからのウィズコロナ時代の施設
のあり方等について、全員で討論をおこ
なしました。

▼濱ともデーについて

2022年3月までの毎月第2水曜日に濱
ともデーを開催します。
この日は、横浜市内在住65歳以上の方
限定で入館料が無料となります。
*ご入館の際に「濱ともカード」をご提示
ください。

▼閲覧室での資料閲覧利用について

閲覧室のご利用は、事前予約制(先着順)